

王 朔

—人と作品—

阿頼耶 順 宏

一九四九年一〇月の中華人民共和國成立以後の文学を、中国では「当代文学」と呼んでいるが、文芸政策の中心となった理論は、延安文芸座談会（四二年五月）における毛沢東の「文芸講話」であった。文学は人民に奉仕すべきものとする指示に沿って生まれた「人民文学」は、もっぱら政治に従属するものとならざるを得なかった。とりわけ、五七、五八年の「反右派闘争」と、六六年から一〇年間続いた「文革」の期間には、「文芸講話」の精神からの偏向が問題となり、そのために迫害され、死に追いやられた作家も多かった。

七六年に「文革」が終わったあと、こうした極左的傾向への反省から、「文革」中に批判された作家たちの「名誉回復」が行なわれた。若い作家たちも数多く現れて、現代中国社会の矛盾や否定面と正面から対決しようとし

た。従来禁忌とされていた愛情や性の問題を描き、人間の性の解放を求めるものなど、題材の上でも手法の面でも、さまざまな新しい試みがされるようになった。「文革」後、特に七九年以後の約十年間、中国の文学はまさに百花斉放、空前の隆盛期を迎えた。「文革」後のこの時期の文学は「新时期文学」と呼ばれ、自由の拡大と多様化を求めて作家たちは従来見られなかったタイプの作品を次々に発表した。学生たちを中心とする、民主と自由を要求する運動も非常に高まりをみせていた。——そして八九年六月四日、天安門での血の弾圧の日を迎える。

あの日から一年余り、北京での戒厳令は解除され、秋に開催予定のアジア大会の準備に北京は活気をとりもどしていると伝えられるが、文芸界では五月に人民大会堂で「延安文芸座談会での講話」発表四十八周年を記念する学術討論会が開催され、一方、「新时期」の作品を紹介してくれた『小説選刊』などの文芸誌の停刊が続いている。中国文芸界に、「六四」までの熱気は感じられない。またもや沈鬱な冬の時代にはいったようである。

その「新时期文学」の後期に、突然現われて一種のブームをひきおこした青年作家がいた。王朔（ワン・シュ

オー)、五八年北京生まれ、三十二歳。彼の小説が、なぜこの時期に熱狂的に歓迎され、『王朔熱』(王朔フィバー)をおこしたのかを考察してみたい。

一

北京の『光明日報』(八九年六月六日)は王朔の小説について、肖珂という人の一文を掲載した。

近ごろ、『王朔ブーム』が文芸界で最も注目される現象となっている。彼の小説はすでに四編が映画化されており、彼の小説を載せた刊行物は印刷部数が上昇する。賛成者は一九八八年を『王朔年』と呼び、攻撃者は彼の作品を『ごろつき文学』あるいは『無頼文学』と呼ぶ。新流派の評論家は王朔を現代派あるいは、後期先鋒派の隊列に入れ、通俗文学では彼を本流派の猛将とし、法制文学では王朔と法制との関係の研究討論に努めている。……

ここにいう映画化された四編の小説は、『浮出海面』(映画の題名は『輪廻』、日本公開時の

題名は『輪廻^{りんね}』、八八年西安映画製作所、監督・黄建新、脚本も王朔)。

『一半是火焰、一半是海水』(映画の題名も同じ、八八年北京映画製作所、監督・夏綱) 日本未公開。

『橡皮人』(映画の題名は『大喘気』、日本公開時の

題名は『失われた青春』、八八年深圳影業公司、

監督・葉大鷹、脚本・葉大鷹、張前、王朔)。

『頑主』(映画の題名も同じ、八八年峨眉映画製作所、監督・米家山) 日本未公開。

である。同一原作者の小説が同じ年に四本も争って映画化されるというのは、きわめて異常な現象である。これには近年、中国では映画製作にも独立採算制がとられ、もうかる映画を作るために、娯楽性や話題性が求められるようになったことも関係しているようだ。主人公は新しいタイプの若者、ボンボンと飛び交うユーモラスな会話と鋭い風刺、都会での自由な恋愛とアウト・ローの生きざま、ブラックマーケットでの争い、そして物語性に富む王朔の小説は、映画化には『うってつけ』のものであった。

ルポ・ライターの左舒拉は、八九年三月一日から三日まで、中国映画評論学会(原名、中国影評学会)と『中

国電影報、『電影芸術』が連合して開催した王朔原作の小説を改編した四本の映画の研究討論会で、参会者が激しい論争を展開した状況を述べている。^①

反対意見は、——それらの映画が意識形態の上でも品位の面でも低俗で、大部分の人、とりわけ若者たちに受けるよう、セックスの意識と政治的不満の発散で、満足させようとしている。作品の提唱する生き方は、世の中を茶化し、恥を知らぬ実利主義で、西欧のヒッピーたちのような物質文明への反対すらなく、享楽を求めるだけで、社会的責任感はなく、典型的な無政府主義の傾向をもつ。理想を追求しようとせず、虚無主義的で、社会の病的状態や不正に、どう対処すべきかを知らない。教授や作家や大学生を嘲笑する反知識的な気分があり、病的な社会環境での前途への漠然たる思いを表現している。——などというもの。

賛成意見では、——これらの映画での道徳批判は教育的意義をもつ。青少年の鋭い眼は虚偽をたちまちに見破る。過去にわれわれは虚偽を真実と見るよう強制したことがよくある。これらの映画が、ありのままの生活を飾らずに見せ、伝統的な道徳家の言行不一致に強烈な反感を浴びせているのは、重要な社会的意義をもつ。主人公

の強い道徳批判の意識は、自分の犯した罪に対して深く後悔し、改心するところにも表現されている。道徳教育を説く教授や通俗小説家ら、エセ知識分子を嘲笑するのも、知識を軽視する社会の悪弊に対する逆説的批判である。——など。

左舒拉は賛否両論をあげたあと、映画に登場するごろつきたちにも一種の公衆意識の自覚があること、行政的な手段が失われ、伝統的な価値観がいかに弱くもろいものかがわかること、これらの青年たちの、図々しく世間をなめてかかる常軌を逸した考え方は、社会に存在する傲岸不遜な官僚臭を、裏からあぶり出すものだと述べ、観賞価値をもつ一種の芸術映画といえることができ、と評価している。

二

王

しかし、王朔の小説は、映画の原作として議論されるだけで終るものなのであろうか。「新时期」の小説として人びとが争って読もうとした理由は、いったいどこにあったのか。そうしたことを考える前に、王朔の経歴を調べてみよう。

『收穫』（八十七年第六期）に發表された中編小説『頑主』が、『小説月報』（八十八年第二期）に轉載された際の作者簡介（簡単な紹介）は、「王朔、男、北京市人、曾發表過多篇小説（多くの小説を發表したことがある。）。」という漢字十五字だけの文字どおりの簡介であつた。

『青年文学』（八十六年第十一期、第十二期）に發表された中編小説『橡皮人』が、『小説選刊』（八十七年第一期）に轉載されたときの「作者簡介」は、かなり詳しい。

王朔、一九五八年八月生、北京市の人。七十六年高校卒業後、北海艦隊、北京医薬公司に勤務したことがあるが、現在待業（就職待ち）。七八年より『空中小姐』、『浮出海面』、『一半是火焰、一半是海水』等の小説を發表。目下、一連の小説『単立人探案集』を創作中、明年初め次々に出版。

王朔の詳しい人物像が初めて紹介されたのは、『大衆電影』の八九年第六期、第七期に連載された左舒拉「王朔——あえて常識を輕視する“俗人”」であつた。

それによれば、——王朔は“旗人”（満洲人）であり、「文革」が始まったときは小学二年生。天地もくつがえ

すほどの運動の中で、少年は、それまでいばりかえつていた指導者や高級幹部、スターや作家らが、人びとつるしあげられる哀れな姿をみた。日本兵をやつてて役人になったと得意げに語つていた父親に、革命前に何日か国民党政府の警官をやつたという「汚点」があることも知つた。

「文革」が進むにつれて、北京市内の若者たちは、^二「ごろつき運動」の集団になつていく。かつて毛主席の査閲を受けた紅衛兵たちも、「革命行動」にあきははじめ、酒を飲み、集団でけんかをし、女を追っかけたり、兵隊の帽子をとったり、いたずらやいやがらせをして楽しんだ。市内にはいくつものグループが生まれて勢力を争つた。十二歳から二十歳あまりまでの青少年は、男も女も、あらゆる権威を無視し、したい放題の生活をしていた。

スパルタ教育で育てようとした父親に、王朔は激しく抵抗する。暴力をふるう父親を憎み、とりわけその「汚点」を知つてからは父親を輕視し、チンピラ、不良と罵られながらもますますその傾向を強める。

高校時代には公安局につかまり、拘留も経験する。一回めは、三十数人が集団で、六人をなぐつたという事件だったが、二回めは、七六年四月五日の天安門事件のと

きで、その年の一月に死去した周恩来首相を悼む人びとが捧げた花輪を、当局が撤去したことに憤慨した民衆が騒いだのだが、十八歳だった王朔は、鎮庄に出勤した警官のヘルメットを奪って放り投げたためにつかまり、三か月のぶた箱生活を体験する。

七六年に高校を卒業するのを待ちかねたようにして、父親は無理矢理に王朔を軍隊に入れてしまう。王朔の部隊は青島にあり、北海艦隊に属していた。衛生兵としてのしごとは大したことはなかったが、部隊の食費の標準は、当時一日わずか四角五分、毎日窩頭（トウモロコシやコーリヤンの粉を蒸して円錐形にしたもの）と漬物だけだった。が、それ以上に我慢できなかったのは、上下の階級の違いによるひどい差別だった。そのとき起こった二つの事件が、毛沢東思想の大学校といわれた部隊の神聖感を完全に投げ棄てさせることになる。

ある寒い夜、歩哨に立っていた王朔が震えながら、炊事場の窓からのぞきこむと、テーブルいっぱいにご馳走を並べさせて、連隊長が上機嫌で酒を飲んでいた。王朔は頭にカッと血がのぼった。

もう一度は、祝日には特別料理が出るようになっていて、腹をすかした王朔らが肉入りの料理を久しぶりに前

にしたとき、突然二人の上官が来たために、王朔ら三人の兵隊が追い出された。教育係は、自分はたらふく食べたあと、王朔らにいった。「家に客が来たとき、子供が食卓から追われるようなものだ。上官は客のようなもの、お前らはつらかったろうが、一回食事を抜いただけのことだ。」

王朔のおさえていた反抗心に火がついた。誰がなんといおうと、おれはおれのやり方でやる。彼は部隊の規則を無視し、街へ出て女の子に声をかけては、海辺で遊んだり泳いだりし、夜にも隊に帰らない——部隊から追い出されるのを待つ王朔にこわいものはなかった。

遊びまわり、ひまのできた王朔は、小説を書き始める。最初の作品は、七八年に『解放軍文芸』に掲載された『等待』（『待つ』）で、ひとりの女の子が、どのようにして家庭の束縛から逃れたかという話であった。才能ある兵士を発見した『解放軍文芸』から、編集部への配置がえを要請してきたとき、部隊の上官は王朔にはきつと強力なバックがあるに違いないと推測したという。

全国的に有名なこの文芸雑誌の編集員として北京にもどった王朔は、しかし、まじめに原稿を読む気もなかったらしい。有名な作家の姚雪垠や王亜平の原稿を送り返

し、彼らがカンカンになって怒るさまを想像して、ひそかに楽しんでいた。

「三中全会」が開かれ、「改革」「開放」の風潮が高まってくると、王朔は現役軍人の身分を利用して、広州、深圳、上海、蘇州、杭州と走りまわり、カラーテレビやテープレコーダーの闇の売買で荒かせぎをする。部隊の方でも、電気製品を個人的に世話してもらって大喜び、王朔はなかなかのやり手だと評判もよく、羽振りがよくなった王朔は、毎日のように女の子と遊び回って楽しんだ。——この頃の経験が彼の小説の題材となって評判を呼ぶことになる。

七九年に広州で遊んでいたとき、中国とベトナムとの間で戦争が始まり、南方の都市では緊張感が高まる。王朔にはやはり現役軍人としての責任感があった。急いで青島の部隊にもどったが、人びとは戦争にあまり関心がなく、部隊の空気もいたって平静、逆になぜ帰ったのか聞かれる始末だった。

がっかりして、やる気を失った彼は、軍隊をやめることを決意し、八〇年に正式に復員し、北京医薬会社のセールスマンとなる。しかしここでも、世間話をしたり、茶を飲み、新聞を読み、あとは顔パスで映画をみたり、

共產主義青年团支部書記の女性と、「人生」を楽しんだりという、だらけた日をすごしていた。

八二年に、経済犯の取締りが強化され、電気製品密売の連中がつかまり、王朔も仲間だったと白状したため、うるさく調べられる。一千元余の不法所得のあったことを認めると、毎月三十六元の給料の中から三十元を返済させられることになり、ばからしくなって会社をやめる。

やがて王朔は、資本もない人間でもやれるしごとを見つける。人から金を引き出して大口の商売をし、儲ければかなりの歩合金をとることだ。ところが、失敗すれば、金を出した連中のかわりに自分が危い橋をわたり、時には命も落しかねない。しかも、人びとが金もうけに狂奔するようになると、そう甘い汁ばかり吸わせてくれない。彼に好意をもってくれていた支部書記の女性からの借金も多額になると、彼女もきびしく返還を迫る。

王朔は再び広州に行くことにする。ポケットに「七分」の金しか残っていなかったとき広州民航のスチュアデスと知り合い、彼女のひものような生活をする。八四年に発表した小説『空中小姐』（『スチュアデス』）はこのことを書いている。左舒拉は

「この小説をわたしは読んでいないのだが、男女の愛

し合うさまをとて純情に書いているらしい。もしそうなら、それは全くでたらめで、絶対に信じてはいけない。実際はこのとき、王朔はスチュアーデスを食いのしながら、一方では現在の奥さんと仲よくなっていたのだから……。」

といっている。八五年に発表した『浮出海面』（『海面に浮かび上がる』）はこの奥さんと知り合ったときの話、王朔はこの小説はわりあい正直に書いている、といったそ
うだ。

いずれにしてもこの時期、王朔のちに発表する小説の主人公のように、闇商品の売買で土地のやくざとわたり合い、酒と女に明け暮れる日々を送っていたらしい。

八六年に『一半是火焰、一半是海水』や『橡皮人』を書いているが、ちょうど「ブルジョア自由化反対」運動の最中で、雑誌の編集部から、「面倒がおこらぬよう、結末を明るくものに書き改めるように要求してきた。」「原稿を売って食わねばならない以上、売れることが大事」と、王朔は書き直しにに応じている。その後発表した『頑主』や『玩的就是心跳』などは、初期の作品にみられたアウトロー（無法者）の生きざまそのものよりも、むしろ軽妙な会話や、ストーリーの展開の方に重点が置かれ

るようになり、それに不満を感じる読者も多いようだが、いまこの国で小説を発表しようとするときの制約を思えば、一方的に作者を責めることは酷であろう。

こうした経歴をもつ王朔の作品について、さらに考察をしていきたい。

三

映画『輪回』の原作『浮出海面』（上編・下編）は、北京発行の文芸雑誌『当代』八五年第六期（八五年十二月刊）に発表された中編小説、作者は王朔と沈旭佳の二人となっている。

主人公石崖（シー・パ）は両親がなくなったあと、北京で気ままなひとり暮らし、今では彼のアパートは友人たちのたまり場になっている。今日も応接間では若い男女がダンスの練習で騒いでおり、デイトの約束をすっばかしたガールフレンドが、二時間も待たされたと怒って電話してくる。眠ろうとして、冷蔵庫のビールを飲もうとすると、連中が飲んでいる最中で、もう一本も残っていない。この小説の中にも作者の経歴でみたような場面

の描写がいろいろ出てくる。

上海で北京籍の海軍士官老紀（チーさん）と知り合い、すぐ仲良くなった。二人の短編小説が、同じ雑誌の同じ号に掲載されたことがあったのだ。

彼ら兵士たちは、休暇で北京に戻ると、群をなして次々にレストランを回り、女の子をさがしてはナンパした。

ぼくは例のガールフレンドから逃げるために午前中ずっと外出していた。昼に帰ると、ちょうど老紀らが、舞蹈学院の女の子を何人か連れて来て、応接間で海千山千の大ぼらを吹いているところだった。泡を食って逃げる違法漁業の韓国の漁船を追いかけた話、公海でいかに大胆にソ連の巡洋艦と向かい合ったかという話、……

踊り子のひとりに、石芭が前に劇場で見たことのある于晶（ユイ・チン）がいた。

交際が始まり、食事をしたり、北京の町を歩いたりするが、于晶は、こんなに何日もつきあっても、あなたがまともなしごとをしているのを見たことがないと、別れ

ようとする。

石芭は青島の姉の所へ行って何日か過ごす。「ぶらぶらして、先のことも考えない。」と姉に説教され、于晶のことをいって喜ばせ、でも彼女とはもうパーになった、といって姉を怒らせる。

舞踏団のしごとで忙しい于晶も、妙に石芭のことが忘れられず、再び交際が始まる。上演のたびに熱心に見に行く石芭。

レストランで石芭は、高校時代の同級生、劉華玲（リユー・ホワリン）に出会う。彼女は外国人と結婚して出国し、外国籍をとったあと離婚、多額の慰謝料をとってシンガポールに定住し、悠々とくらしているのだという。

「あんたやっぱ、でたらめばかりやっていて、政府はもう逮捕しないの？」

ぼくは笑った。七六年にぼくが「天安門事件」に巻きこまれて、三か月間ぶちこまれたあのことをいっているのだ。ぼくたちはあの混乱と災難のひどかった年のことを、楽しく思い出した。彼女はまだぼくが吊るしあげの台に立っていたあのひきつった顔つきを覚えていた。……

「ぼくはがんばりとおせなかったんだ。入れられると、なぐられもせぬうちにすべて自白さ、とても、四五」

（四月五日の天安門事件）の英雄には、なれなかった。今でもまだ、名誉回復のとき送りがえしてきた声涙ともになる自白書を保存しているけれど、読むたびに笑えてくる。」

石邑と于晶が大通りを歩いていたとき、石邑が車にはねられる。練習と公演の合い間をみて于晶は病院に通う。二人の間の愛情はしだいに深まり、結婚することになるのだが、――。

小説の最後は、二人の家に劉華玲らがおしかけてきて、酒を飲んで酔いつぶれる場面である。さびしいと叫んで泣く劉華玲。石邑と于晶も、何か思い屈するところがある。二人は向かいあって飲みつづける。

「あの人たちは？」わたしはボートとした頭でたずねる。

「岸にいるよ。」石邑はいう。「浮きあがっていったらみえる。」彼はへやの中で水泳のかっこうをし、椅子をふんでテーブルの上にあがる。

『浮出海面』という題は、小説の最後のこのことばからである。

この原作を映画化した黄建新は五四年生まれの、いわゆる「第五世代」の監督。『黒砲事件』『錯位』（『スタンド・イン』）の二作で官僚主義を痛烈に批判し、その映像の新鮮さも評判になった。今回の『輪回』は彼の第三作で、脚本も王朔であるが、原作とはずいぶん変えている。

両親をなくした若者がアパートで気ままなひとり暮らしをし、若い踊り子と知り合い、愛し合う――というところは原作どおりだが、闇商品のブローカーで生計を立てている石邑が、期日に金が払えず、やくざたちにドリルで足に穴をあけられて不具者にされてしまう。于晶との結婚のあとも、彼は心楽しまず、筋骨たくましい大男の姿をアパートの壁に描き残して、ベランダから投身自殺をする――というストーリーになっている。このやくざとのいざこざは、王朔のほかの作品に多く出てくるが、『倒爺』（タオイエ）と呼ばれる個人経営のブローカーたちの生きざまを描き、せつかく見つけた恋人との生活を続けることもできず、自殺する悲劇を描いている。

四

『一半是火焰、一半是海水』は、雑誌『啄木鳥』（八六年第二期）に発表され、八八年に夏綱（五三年生まれ、『第五世代』の監督）によって映画化されている。（日本未公開）

この小説も上部下部からなる中編小説で、その題材の新奇さで注目され、激しい論議をひきおこした。八八年六月には『新時期争鳴作品叢書』の一冊『貞女』に、李復威と曾鎮南による二編の評論とともに収録されたが、さらに八九年三月出版の『八十年代文学新潮叢書』の一冊として『一半是火焰、一半是海水』の書名で、他の作家の作品とともに収録されている。⁴⁾

「おい、二組とも部屋にはいったぞ。ルームナンバーは927と1208、ほかに女ひとり、1713にはいった。」

「了解」

わたしは電話を切ると、すぐにオーバーを着て、カバンを持ち、テレビを見ていた方方（ファンファン）を呼んで、階段をかけおりた。四千元で買った旧型ブ

ジョが町角の歩道に停めてある。乗りこむと、すぐに通りに出て、遠くに灯りのきらめいている「燕都」ホテルに走らせた。

これを書き出しである。主人公の張明（チャンミン）は仲間の方方（ファンファン）と、ホテルの洗面所で警官の服に着替え、公安局員になりすまして、連絡のあった部屋をホテルの従業員に開けさせる。

ホテルの客のへやに女友だち亜紅（ヤー・ホン）を送りこみ、取締りと称して客を恐喝し、金をゆすりとするという「美人計」（美人局）の主謀者がこの小説の主人公である。この青年の家が仲間のたまり場で、ホテルのサービス・カウンターの衛寧（ウェイ・ニン）も来ており、連中は着やマージャンで時間をつぶしている。

張明は公園で本を読んでいた女子学生と知り合う。労働改造犯で釈放されてからも、言いがかりをつけて、人をゆするのが商売と、自分から話す張明に、彼女は逆に興味をもつ。

何日か後、車から声をかけてみた女の子は、偶然にも公園で出会った女子学生吳迪（ウー・ディ）だった。快活で純真な彼女は、不良青年らの率直さに惹かれ、張明

の所にもよく遊びに来るようになる。が、ある日、張明が家で亜紅と一緒に彼女を目撃して、激しいショックを受ける。彼女は張明の何人かの女の中のひとりに過ぎなかったのだ。

例のように警官の服装でホテルの部屋に乗りこんだとき、肥えた商人と寝ていたのは呉迪だった。衛寧のところへ、金がほしいからと彼女自身が頼みに来たからだとして、張明は呆然とする。

やがて彼らのグループは逮捕され、主犯の張明と方方は十五年、衛寧は十年、亜紅は七年の実刑となる。

労働改造農場で張明は衛寧と出会い、呉迪が捜査を受ける前に、部屋にカギをかけ、腕の動脈を切って自殺したと、遺書はなく、眼に涙を浮かべたままだったことを聞く。(以上が上部)

農場で葡萄栽培の作業をしていた張明は、二年めの末に重症の肝炎で倒れる。半年入院したあと、再発感染の恐れありということで、帰宅して監視つきで療養することを許される。家でひとり寝ていても、自殺した呉迪のことが頭から離れず、張明は苦しむ。夜も眠れず酒を飲んで倒れる。

一か月入院、病氣療養の名目で北京を離れた張明は、

南の都会に行き、さらにある島に行ってみようとして、船の中で若い女の子胡映(フー・イー)と知り合う。

労働改造犯で療養中だと自分からいう張明に、彼女は平気で親しんできて、島でも同じ宿屋に泊る。自殺した昔の女友だちのことも話し、一線を守ろうとする張明の態度にじれた胡映は、たまたま海辺で、作家と称する二人の青年と知り合い、誘われるままに夜の海に出ていくとする。ひきとめるのも聞かずに出かけた彼女を案じる張明の予感はある。

胡映を船で送り返した翌日、港で二人の青年を見つけた張明は、ナイフで二人の足を何か所か傷つけ、駆けつけた警官にとらえられる。取調べの結果、二人の青年は詐欺と輪姦の罪で拘留、張明は釈放される。(下部)

この小説を収録した前述の『貞女』の中で、李復威はこの小説が、犯罪者の心理を叙述する方式をとっているとして、「法制文学」の領域に入れ、また曾鎮南も、「法制文学の及ぶ範囲は、特殊な題材の領域であって、人類の犯罪と懲罰である。」として、「この小説の出現は、法制文学創作の深化を明示するものであって、まじめな通俗文学、あるいは表面的には浅いが内容的には深い通俗

文学が、純文学の聖域に突入していることを明示するものだ。」と述べている。

「文革」のあと、無実の人びとが迫害を受けたのは、中国の法制に不備があったからだとする議論がにわかに活発となった。文芸界でも、犯罪を題材とするものを「法制文学」と称し、日本で推理小説とされるものもこの領域にはいるものとされて、いわゆる大衆文学なるものの境界もつけにくくなった。

前述の『八十年代文学新潮叢書』では『一半是火焰、一半是海水』の書名の副題に「通俗小説選萃」とあり、序文でも、近年盛んとなった通俗小説の中にも、優秀な作品が少なくない、と述べているところをみても、この小説をどの領域に入れるかに、とまどっている様子がかがえる。同じ序文で、「厳格に言えば『一半是火焰、一半是海水』は探偵小説には入れられない。この小説は、別にくわしく公安職員の捜査過程を書いたものではないからである。犯人が逮捕され、訊問も終了してから、作者が訊問記録や各種の材料によって、犯罪と、犯人の周囲の人びとの生活を、心理的芸術的に展開したかのようである。」と述べているのも、突然出現した新しいタイプの小説を、どの枠組みに入れるか、当惑しているように

みえる。

この妙な題名『半分は火焰、半分は海水』について、同じ序文で、「小説の上部は犯罪者張明が犯罪を犯す泥沼の中での浮沈を書き、下部では張明の新しい生活に向かつての転変を書いているが、これがおそらく『一半』、『一半』としている意味であろう。」⁽⁵⁾とするのは、そのとおりだろうが、とにかく王朔はこのあとさらに次々と、さまざまな題材の小説を発表し、才能ある作家としての評価も定まりつつある。「法制文学」だの「通俗小説」だのと騒ぐことはなかったのである。

五

中編小説『橡皮人』（上、下編）は、八六年第十一、十二期の『青年文学』に発表された。（のち八七年第一期の『小説選刊』に再録）これが八八年の葉大鷹監督の映画『大喘氣』の原作で、この脚本には王朔も参加しており、ほぼ原作に忠実な映画化といえる。

仲間誘われ、一儲けをたくらんで南の都会にやってくる主人公の青年を、映画では、『子供たちの王様』の青年教師、『狂気の代償』で書店を経営する青年を演じ

た謝園（シェ・ユアン）が主人公の丁建（ティン・チェン）を演じている。この都会（広州）で彼は美しい女性ブローカーの李白玲（リー・パイリン）や、明るくかわいい解放軍の女性兵士張璐（チャン・ルー）を知る。

カラーテレビや車を買いつけて儲けようとするが、相手はブラックマーケットのボス、権謀術数にたけた曲者で、無鉄砲な若者も鼻であしらわれる。カラーテレビの買いつけにわざわざ出かけた汕頭でも、ボスの妨害で商談は成立しない。カッとなってボスに切りつけ、手下たちに追われる。留置場でも手下たちからリンチを受けて殺されそうになる。

映画ではこのあと、傷ついて帰った丁建が、李白玲から贈られたバイクで、屋上を走り回る場面、大きな叫び声をあとに地上にたたきつけられるバイク。屋上の丁建のゆがんだ笑い顔の太写し、というふうに使われて終るのだが、原作では、広州にもどった丁建が李白玲に電話してみると、彼女が副經理だといっていたのは嘘で、ただのタイピスト、しかも早くにやめさせられていたことがわかる。

生きる気力さえも失いそうになり、あてもなく街を歩いていたある日、背の高いハンサムな青年士官と楽しげ

に語り合いながら歩いている張璐を見かける。人ごみの中に消えていく二人を茫然と見送って、丁建は立ちつくす——そのあと「后記」として、その他の登場人物のその後を、ひとりずつ簡単に書いて終る。

原作の題名『橡皮人』の「橡皮」は、ふつう消しゴムやゴムのことをいうが、ここでは象皮病（皮膚が象の皮のようになる）にかかったような、生気のない顔の人間をいったものであるうか。原文では、闇商売仲間の女性、楊金麗（ヤン・チンリー）が丁建を罵るときにこのことばが出てくる。

「あんたなんか人間じゃない／」楊金麗は顔色を青くしてわたしをにらみつけた。

「あんたは昔から人間じゃない、寝ても覚めても人間じゃない。誰も知らないけど、わたしは知っているわよ。」

「ぼくは何だね、年とったオオカミかい？」ぼくは冗談にしたかったが、顔色はかわっていた。

「あんたなんか」彼女はちよつとつまつたが、突然言つた。「橡皮人よ／」

もう一か所、結末の所で、

「わたしは血の気のない、橡皮のような光沢と橡皮のような質感をおびた顔で街を歩いていた。誰でも、白痴でさえも、わたしが人間でないと一目みればわかるだろう。」

とある。「橡皮人」とは何にぶつかっても平気な人物をいう。丁建にとって謎の女性李白玲は正体不明の「橡皮人」である。——とする説もあるが、⁽⁶⁾どうであらうか。

原文をみる限り、橡皮人は丁建自身のことであり、李白玲をさすものではない。いずれにせよ、この題名が、開放政策による社会変動の中に出現した青年たちの、激しい絶望感を象徴するものであることはまちがいない。

六

『頑主』（『悪ガキ』）も中編小説で、『収獲』の七年第六期（八七年十二月刊）に発表された。（『小説月報』八八年第二期に再録）

この小説の映画化は八八年、監督は米家山（ミー・チ

アシャン）、彼の妻は有名な女優潘紅（パン・ホン）で、映画『頑主』の女主人公として出演していることも評判になった。日本では未公開だが、八九年の香港国際电影节に出品され、現代中国社会を諷刺する喜劇映画として高い評価を受けたという。

この小説でも、ボロ儲けをたくらむ青年たちが主人公だが、今までの重苦しいストーリーとは一変して、ユーモアと諷刺性の強い物語となっている。資本金もない三人の青年が考えだした「3T」公司というのは、「替人排憂、替人解難、替人受過」（人に代わって心配をなくし、人に代わって困難を解決し、人に代わって我慢してやる。替はTと同音で、代わる意）であって、奇想天外の代行業なのである。

青年作家から、認められたいという電話の申込みがあると、「3T賞」なる文学賞を受賞させることにし、特等の賞品はクーラー、一等から三等まではカメラ、ただし費用はすべて青年作家もちとする。肛門科の医者からの電話で、急患のためデパートのハンカチ売場の女性とデートに行けないと言ってくると、医者への代わりに一日、女性のお相手をする青年。生きていたくないという男の話を聞いてやったあげく、首根っこをつかまえられ、部

屋をひきずりまわされたり、夫とうまういかない若い婦人の悩みをながながと聞かされたり、——代行業も決して楽ではない。

「3 T賞」の授賞式の当日も大変だ。駆り出された連中が、まじめな顔で壇上に座り、共產党市委員会幹部になりすまして、内容のない挨拶をものものしい態度でやらされる青年——まことに抱腹絶倒の場面だが、世間でも全くこれと同じような形式だけの会合や式典が、もったいぶって行なわれていることを考えると、王朔がこれらの青年を借りて言おうとしていることが、痛いほどわかってくる。一人の青年の父親や、趙堯舜（／＼）という名の教師らの、道徳を説く裏にかくれた醜い人間性を、青年たちは醒めた眼で見つめている。素直に自分の思うままに行動しているのは青年たちであり、笑うべきものを笑い、からかうべきものをからかっているだけのことである。「厳粛」であるべき世間のしきたりを軽視し、世間を茶化して喜んでいるかにみえる青年たちの白けた心情を、王朔はみごとに描きだす。「3 T」会社の業務範囲は、家庭内のごたごたから、男女関係、心理治療等、にまで及ぶのだが、専門知識も皆無の青年たちは、当意即妙に対応法を考え、客を満足させていくという所にも、

知識重視の専門家や学者先生が世間では何の役にも立たないという現実への、鋭い諷刺をみることもできよう。

八九年六月四日の天安門事件のあと、文芸界でも引締め政策が強められている。こうした内容をもつ王朔の作品は、当分発表される可能性はないだろうと考えていたのだが、八九年十二月に発行の『当代』（八九年第六期）に、王朔の中編小説『永失我愛』（『永久にわが愛を失う』）が掲載された。

結婚を目前にした青年労働者が、急に脱力感を覚え、手がふるえだし、口に入れた物をかむこともできなくなる。筋肉につながる神経の障害、筋無力症と診断され、結婚のための健康診断書は出せないといわれる。

何も知らずに結婚の準備をしている愛する女性のために、青年は病気をかくしつづけ、わざと彼女に冷たくして、自分を嫌うようにしむけようとする。「どうして……どうして……？」と泣き叫ぶ彼女——。

十月一日、工事落成記念式典のあと、盛大な集団結婚式が行なわれる。入院して寝ている青年の部屋に、花嫁姿の彼女が夫となった男性と一緒に見舞いに来てくれる。

わたしは無表情で彼女を眺めた——わたしはもう、どんな表情もできなくなっていた。ちょっと笑うことさえも不可能だった。ただ一つだけ、まだ自由にできるものがあつた。それはわたしの眼から流れだし、全く知覚のない頬を伝わり、ポトポトと、わたしの方に伸ばされた美しい手にしたたり落ちた……

王朔の作風はまた大きく変化している。これは一編の純愛小説である。思い屈した青年たちの代弁者の姿は、もうここにはない。これが「売文」のためのやむをえぬ妥協の結果なのか、新しい小説世界を開拓する試みなのかはわからないが、この作品は、甘いとだけで片づけられない人の心のやさしさを描いて、感動的でもある。多彩な才能をもち、激しく揺れ動く中国社会の中で、さまざまな経験をした青年作家王朔が、これから先どのような自己の世界を創造していくか、楽しみである。

——一九九〇・七・二〇——

〔注〕

(1) 左舒拉「根拠王朔小説改編的四部影片引起熱烈爭論」(『大衆電影』八九年第四期)

(2) 左舒拉「王朔——一個敢於藐視常規的、俗人」(『大衆電影』八九年第六期・第七期)による。

(3) 中国作家協会創作研究室選編『新时期争鳴作品叢書』一九八六年編上『貞女』(長春、時代文芸出版社、八八年六月刊)

同書の他の収録作品(評論を付す)は、古華『貞女』、謀容『走投無路』、莫言『紅高粱』

(4) 李復威・藍棣之主編、劉玉山選編『八十年代文学新潮叢書』『一半是火焰、一半是海水』通俗小説選萃(北京師範大学出版社、八九年三月刊)

同書の他の収録作品は、李迪『傍晚敲門的女人』、馬寧宣成『五百神像』、路草『讓我們互相祝福』、馬永安『復活的美女』

(5) 同右書「選編者序」3~4ページ。

(6) 『中国映画祭89』(徳間コミュニケーションズ東光徳間事業部、八九年十月刊)